

# 高齢者のQOL向上につながるコミュニティ活動を 促進する価値共創モデルの提案 – 高齢者の社会活動の成功事例分析から –

藤井 美樹<sup>\*1</sup>・小坂 満隆<sup>\*1</sup>

## A Proposal of Value Co-creation Model to Promote Elderly People's Community Activities Concerning QOL Improvement – Case Studies of Successful Social Activities by Elderly People –

Miki FUJII<sup>\*1</sup>, Michitaka KOSAKA<sup>\*1</sup>

**Abstract**– It is an important issue that elderly people spend their social life with something to do after retirement. First, a skill and motivation improvement model has been developed through the analysis of an amateur orchestra team in this research. Then, this model is discussed whether it could be applied to other cases of elderly people activities as “a value co-creation model” through case studies of successful examples.

**Keywords**– value co-creation, aging society, mutual help, mediator, QOL(Quality of Life)

### 1. はじめに

現在、日本は超高齢社会を迎えつつある。高齢化研究を2つに分けた時、医療介護や福祉など主に生活支援を必要とする後期高齢者対象の研究と、65歳からの前期高齢者が元気に生きがいを持って活動することで、生活を活性化し、健康寿命を延ばす研究がある。前期高齢者が生きがいを持ち、社会生活を充実させて個人のQOL(Quality of Life)を高めることは介護予防ともなり、今後の高齢社会における重要な課題である。

各省でも「高齢期における健康や生きがい」を軸に、社会の支えとしての地域力、仲間力、コミュニティでの地縁や互助といった高齢社会への取り組みを始めている。内閣府では地域社会参加の機会と自己実現、世代間交流や相互扶助とともに、高齢期への「備え」として現役時代からの社会参加を促進している [1][2]。文部科学省では若年期から高齢期を見越した能力開発、学習からの学びの循環を社会貢献・社会還元とし、リタイア後の生きがい創出を介護予防とする必要性を述べている [3]。

高齢者がリタイア後の長い人生を健康で生きがいを持って過ごすために、まずQOLと生きがいの関係について考える必要がある。QOL概念は基本的な居住環境をめぐる問題意識から生まれ、医療分野においては確固たる位置付けを占めているが、社会資本整備や空間整備に関わるQOLの議論はまだまだ乏しい [4]。高齢世代になると、誰もが次第に若年期と異なる身体や健康の変化に不安を感じるようになる。リタイア後もなお元気で生き生きと過ごすためには、個人が健康に注意を払い、QOLの向上を自ら主観的に認識できる社会生活を送ることが、高齢期における生きがいへとつながる。個人のQOLを高める生きがいには、基本的欲求としての趣味的活動をはじめ、学問などを通じた変化と成長、自己の未来性や生活目標に加えて他者との共同世界における対人的な反響・はりあいなどがある [5]。集団としての所属、達成や名声などの承認、自己充足の願望からの自己実現も、人間の基本的欲求である [6]。

本稿では、アマチュアオーケストラや地域の老人クラブなどの高齢者の社会活動における成功事例の分析を行い、高齢者が生きがいを持ってQOL向上に向けた活動を持続的に行うための価値共創モデルを提案する。

<sup>\*1</sup>北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 石川県能美市 旭台 1-1

<sup>\*1</sup>Japan Advanced Institute of Science and Technology, 1-1 Asahidai, Nomi, Ishikawa

Received: 29 June 2016, Revised: 7 August 2016, Accepted: 9 August 2016.

## 2. アマチュアオーケストラ J 管弦楽団の事例

J 管弦楽団は 40 名の団員中、60 歳代以上が 33 名と高齢者の比率が高く、年に 1 回の定期演奏会活動に向け活性化された活動が継続的に行われていることから、事例対象とした。アンケート調査とインタビュー [7] から、Fig. 1 に示すように、J 管弦楽団がアマチュアオーケストラ活動を持続・活性化させるために、自らのスキル・技術が何よりのモチベーションになるという結果となった。

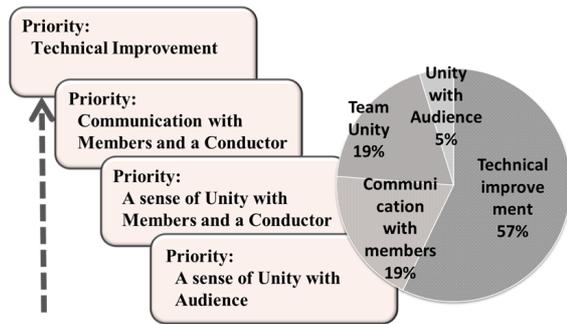


Fig. 1: Motivating factors for activation of an Amateur Orchestra

先行研究によれば、グループ内でメンバー相互に援助行動を促進させることで個人は自己とチーム効力感の二重の影響を受け、グループ効力感を高め予想以上の大きな業績を生み出す [8]。集団の活動においては、他者からの影響が個人へ相互作用となり、個人の行動や業績、さらには個人のモチベーションにもつながる。組織に属して演奏活動をするには、演奏者のモチベーションを満たす。さらに、その組織がよい演奏をできる環境であることが、高次のモチベーションにつながる [9]。

個人が高齢となり、「昔とった杵柄」で再び自分で楽器を持ち、アマチュアオーケストラの音楽活動へ参加しようとするモチベーションを持つ。団体に所属し楽器パートを受け持つという役割の重要性から、意欲的に日々の練習を行い個人の音楽技術、スキルを向上させる。個人のスキル向上は、グループの中で他の団員へも良い刺激となり、切磋琢磨してグループとしてのスキルも向上する。グループスキルの向上は組織としての実力を高め、グループの暗黙知として共有される。実力を伴った良いグループ環境はグループのモチベーションとして具体化し、まとまって仲間の団結力を高める。グループのモチベーションは再び個人の充実となるスパイラルを生む。この関係を Fig. 2 に示す。

J 管弦楽団では、指導を行うリーダーである指揮者自らが「反省会の場」を設け、練習時間以外でも個人・グループの練習環境と音楽スキルを支える。まとめ役である団長は人間関係・環境の場に配慮しつつ演奏会という

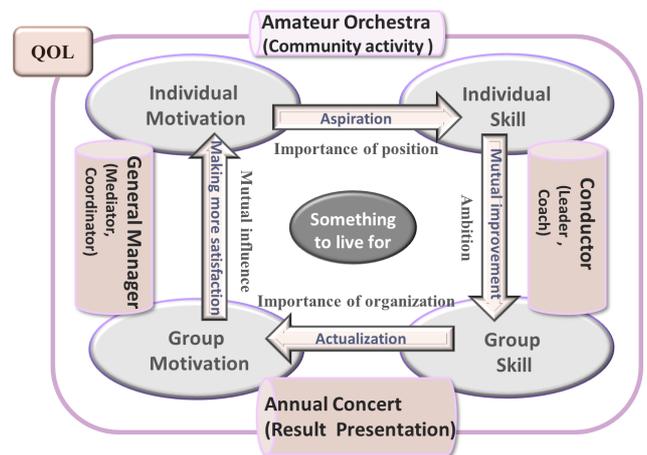


Fig. 2: Motivation and Skill improvement Model of J Orchestra

共通目標に向けてマネジメントを行い、個人・グループのモチベーションを支える。練習や努力を伴った活動の集大成である定期演奏会は「成果披露の場」となる。良い演奏は、固定ファンとしてのリピーターを含めた観客動員数を増加させ、団員と指揮者・団長、さらには聴衆へも価値を提供する。定期演奏会を通して確認できる「個人・グループの技術の向上」は、また 1 年後の演奏会・新しい曲への挑戦というモチベーションにつながり、グループとして充実した活動となる。

アマチュアオーケストラ J 管弦楽団の活動は、個人がモチベーションのためにスキルを磨き、それを再びモチベーションへ循環させることで「生きがいの場」を築く「活性化促進モデル」を確立させていた。

## 3. 高齢者による社会活動の成功事例

2 章で仮説とした「活性化促進モデル」は、他の高齢者活動を持続・活性化するモデルとして当てはまるのか、「生きがいの場」は価値共創となるか、3 つの事例を使い比較・検証を行う。

### 3.1 A 町老人クラブ：ボランティア活動事例

A 町は、人口 50 万人を超える地方都市の中において、その人口が市の 11% を占めるという比較的大きな町である。高齢者が元気な町でスポーツ・運動への参加も多く、地区担当の理学療法士によると健康教室も人数オーバー、午前・午後の 2 部制に分ける盛況ぶりである。A 町には 18 の老人クラブがあり地区連合を形成、連合会長と各クラブの会長という組織となっている。A 町老人クラブの主な自主的な取り組みとして、清掃や資源回収のボランティア活動と地域パトロールのほか、連合会長が年に 1 回、自ら発案・企画した新聞を発行して配布し、

新たな会員の獲得に努めている。12面の内容は各老人クラブの活動のほかスポーツ大会の結果、ボランティア活動やパトロール活動の内容とその成果、県内や全国での受賞状況などであり、新規参入者だけでなく既会員が目にしてモチベーションアップにつながる取り組みを行っている。新聞がきっかけとなり、これまで地域活動に参加していなかった高齢者が、新たな参加者として活動への動機を持つことも多いという。また全会員の6割が女性ということもあり、平成26年からは18クラブそれぞれに1人ずつ女性リーダーを置き、女性委員会を新たに結成した。A町の連合会長と、新しい女性委員会のリーダーへインタビューを行った。代表的な意見を示す。

[A町老人クラブ 連合会長 I氏]

- ・ 男性会員も比較的多くスポーツも盛んな地域であるが、スポーツとカラオケに偏らないようにしている。
- ・ 会員が古紙回収などの自主的な経済活動で、年間に50万円ほどクラブ運営費に回す工夫も行っている。
- ・ 老人にかけるお金の補助などをカットする動きもあるが、老人クラブの発展は、ネットワークづくりとしても地域の防災へとつながっている。
- ・ 地域の清掃などボランティア活動に日々頑張っている人は表彰し、その貢献に応えたいと思う。
- ・ トップが1人だけで長く色々活躍し潰れたクラブもある。新しい人がなかなか役員にならない中、クラブを私物化しないよう心掛けている。

[A町老人クラブ 女性委員会 T氏]

- ・ 60歳を過ぎても老人クラブに入りたくない人は多い。
- ・ 女性は趣味が同じ知人とはいっしょに行動したい。
- ・ 女性が元気になると男性も元気になる。
- ・ 女性の特性を活かした取り組みとして、グラウンドゴルフ以外も企画をしたい。
- ・ お金が発生すると参加は少なくなるので、材料費も1000円以下、活動でのおやつは手作りにしている。

A町の事例が活性化促進モデルにあてはまっているか、見学とインタビューをもとに検証した。

個人が高齢となり、地域社会の活動に参加するモチベーションを持った時、まず老人クラブなどに所属し、その中で自分の得意なスポーツやボランティア活動に参加しようとする。A町では、18クラブの中の、それぞれ所属したグループ内において、ボランティア活動の技術、地域のパトロールなどの方法を学ぶ。グループ内で技能が高く、または熱心に取り組んでいる他者のスキルを見ると、触発され自らも頑張ろうと努力する。個人

の技能・取り組みは、やがてグループ全体の技能向上となる。地区連合の中においては、クラブごとに次はどこが県や市に表彰されるか、などの張合いもある。全国大会での受賞は、県の代表という地域貢献の力となる。グループ内で高まったスキルは団結力を高め、再び会員個人のモチベーション向上へと良い循環を生み出す。このスパイラルを助け、A町老人クラブ全体を活性化させているのは、18クラブを指導者として俯瞰する連合会長である。まず自らが先頭に立ってボランティア活動を行い、地域とも深く連携して新聞の広告費も捻出する。個人ごとの町への貢献にも応えつつ18のクラブそれぞれが発展するため表彰制度を実施、「見える形」として印刷物に残す。地域内にとどまらず市や県、さらに全国老人クラブ連合においても受賞できるように指導し「会員の活動成果」を共通の目的としてグループのモチベーションを上げ、男女ともに多くの会員を地域に根付かせる工夫をしている。また女性リーダーの育成に努め、クラブごとにメディエーターとなる、まとめ役を輩出する。実際に会員個人と各クラブのグループを「生きがいの場」として活性化させるのは、まとめ役としての女性リーダーである。見える形での努力評価は自分達で地域貢献・地域の安全を担うという自信と共にグループのモチベーションとなり、再び個人のモチベーションへつながる持続・活性化した活動になる。この関係はFig. 3のように示すことができる。

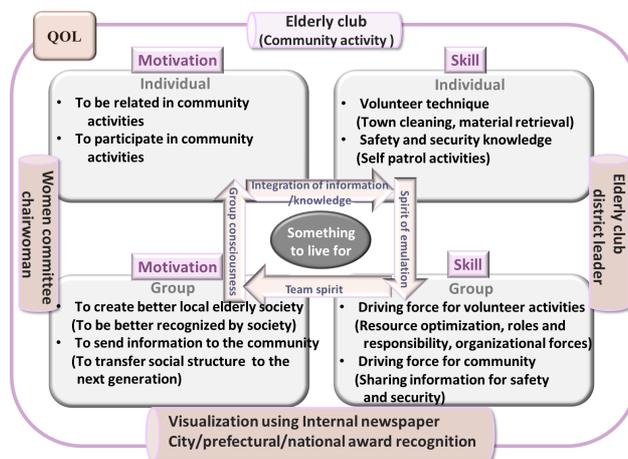


Fig. 3: Activation Promotion Model in A Town

地域高齢者が取り組む社会参加活動の大半は自己啓発のみの学習や趣味・娯楽であるが、ボランティア活動はグループ外の組織や団体とも関わり、社会的役割が広がることで活動から得られる心身の効果が大きくなる可能性がある [10]。このような地域の内外に向けての取り組みを行っているA町は、自分たちの町が暮らしやすく安全になるように、高齢者がまとまりを見せている。

連合会長は町全体の防災・安全を第一に、様々な企画を立て実行、まとめ役としての女性リーダーも軸とした各クラブが連携し、結果として個人とクラブ内だけではなく A 町地区全体へのモチベーション向上・価値の向上も促す工夫を行っている。A 町の事例では高齢者が元気に活動する活性化促進モデルが成り立っていた。

### 3.2 B 町地区交流センター：デイサービス活動と世代間交流

B 町地区交流センターの活動は、介護保険を利用せず自力で通える高齢者に対する交流やレクリエーションを主体とした、登録制の「デイサービス」である。少子化で余った小学校の空き教室を用い、入浴・送迎を行わないデイサービスの施設へと改修、地域と連携した試みで設立された。活動は週に 2 回、昼食をはさんで 5 時間行う。手芸工作などのワークショップと、レクリエーションとしてのゲーム大会、歌や早口言葉、詩や俳句作り、ヨガなど健康体操をベースとして、季節にちなんだ行事や、同じ敷地内に通う小学生との世代間交流も行う。頻繁に行われるゲーム大会では、優勝者などを壁新聞に貼り出す工夫もしている。最近ではトーンチャイム演奏の指導も行い、小学生と協力して発表の場を設ける試みも始めた。毎回利用者全員に看護師資格者が検温・血圧測定を行い、健康手帳にバイタルチェックの記録も残す。交流センターの開始後、既に 12 年を越すが、開始時からの参加者も多数継続して活動しており、結果として利用者の平均年齢が 82 歳と高くなっている。現在 60 代の参加者はいない。活動内容に手芸工作が多いということもあり、参加者は女性が 20 数名、男性登録者は 1 名のみである。メンバーは主に他者との交流を目的とし、週 2 回の決まった予定を楽しみに、生き生きと通っている。参加者は皆、雨の日も雪の日も天気に関係なく自転車や徒歩で通い、風邪で休むことも少ない。うがいや手洗いの徹底と予防接種の呼びかけ、適切な水分補給についての知識や、呼吸法・気功など健康講座実践の効果が表れているということだった。そのため活動内での感染症は 1 度も起こっていない。年間では 90 回にもなる活動を、高齢者が毎回休まずに 1 人で通い続けられる秘訣は何か、2 日間の活動を共にし、見学と聞き取りを行った。数名のインタビューから代表的なものを示す。

[参加者 H 氏]

- ・大正 15 年生まれ、90 歳近いが、もう 12 年継続している。楽しいから。

[参加者 Y 氏]

- ・ここが長く続く秘訣は、スタッフと皆（利用者）が本当に仲良しだから。

[参加者 T 氏]

- ・健康が日課、朝の散歩と山歩き、夕方からは毎日必ず 37 年続けているプールで 500 メートル泳ぎ、その後にジムや水中ウォーキングもする。でもそれだけではコミュニケーションが不足してしまうと考えて、ここに通いもう 10 年以上になる。(83 歳)

[看護師 M 氏]

- ・利用者の平均年齢が高い。介護保険を使わず無理をしないかが心配である。
- ・好きな人どうしてテーブルに固まるので気を配る。
- ・バイタルチェックの間のおしゃべりでは「人生の深い話」が聞けることもある。
- ・健康について皆が指導をよく守ってくれ、そのおかげでインフルエンザなどの流感にかからない。

[指導者 U 氏]

- ・日々、次はどのような内容にしようか考えるのが日課になっている。
- ・利用者から難しいと言われると、どこが難しかったのか自分も新たな発見があり、工夫を行い改善する。
- ・参加者からは、逆に教えられることも多い。
- ・参加者のメンバーと町でバッタリ会うことがあるがイメージが異なり見違えてしまう。皆、何を着ているのか、化粧をしてから出かけようかと、おしゃべりに工夫を凝らしてセンターに来ているのだと実感する。

この B 町の事例が、活性化促進モデルにあてはまっているか、見学とインタビューをもとに検証した。個人が健康維持のため、また参加を続けるためにも介護保険を使わないようにモチベーションを持ち、交流センターに所属する。既に長く参加している人は何でも上手く、それが刺激となって「より上手に作品を作りたい。」「ゲーム大会では 3 位までに入り、自分も壁新聞の写真におさまりたい。」とスキルを磨く。これが短期間であればグループスキルに発展しないが、12 年もの継続により個人の技能は全体へと影響する。毎回の作品作り・鑑賞からは、他者の作品への講評やアドバイスも生じ、それはやがて「全員が上手くできる」技能・スキルとなる。見学時の活動では、羊の干支をモチーフとした手芸や、好みの色を塗って作るプラバン製作が行われていたが、花の色や羊の表情の出来を他の参加者と見比べ、自分の作品に対して何回もやり直し、挑戦する姿も多く見られた。

指導者は、毎回異なる計画を立て 1 人ひとりが楽しめる配慮も行う。通常はまとめ役である看護師も、健康講座とトーンチャイムでは指導を担当する。健康指導や演奏を行う時、指導者は参加者といっしょに活動を行うまとめ役・メディエーターに回る。トーンチャイムは相

手の音をよく聴き、タイミングに連携がないと曲が仕上がらない。小学生との合同発表会を行うことで、地域に向けても発表・披露となるため練習に熱が入り、「小学生に負けないように頑張る」というグループとしての団結も生まれる。地域行事では、ちょうど餅つきを企画する時期であり、参加者の中から杵を子どもに教える担当者・捏ね取りの担当などが決められていた。「捏ね手は、餅がひび割れないようにする水分などのコツがあり、案外難しい」「子ども達に教えなければいけないから、腕に自信がある人を担当にして」「これが本当に「昔取った杵柄」だ」など、世代間での交流を通じても真剣にグループ活動としてまとまろうとする姿が見られた。

参加者は、指導者・まとめ役とのコミュニケーションを通し、様々な作品作りや早口言葉の自主的な練習を行う。ゲームの勝敗においても各自でスキルを磨き、壁新聞やゲーム表彰などの成果をモチベーションとしていた。また、活動の様子が地域の新聞や広報ページにも掲載されることで、「B町地区交流センターのおばあちゃん・おじいちゃんチーム」という地域の顔となっている。「成果の見える活動」はグループを団結させ、リーダー・まとめ役の支えは個人・グループのモチベーションになる。地域や小学生にも良い場を見せることになり、築いた「生きがいの場」として驚くほど長い、持続・活性化した活動を形成していた。Fig. 4 に示す。

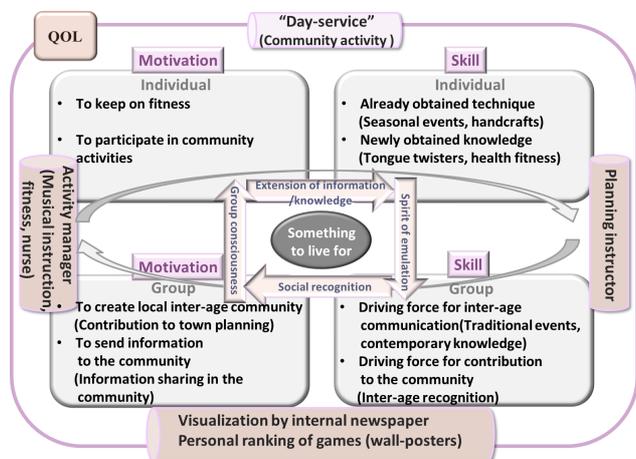


Fig. 4: Activation Promotion Model in B Town

B町の活動は、地域コミュニティで多く実施されている内容である。しかし平均年齢80歳を越える同じメンバーが、年間90回もの集まりを10年以上継続させるためには、居心地の良い環境を維持させる、優れたまとめ役の存在が不可欠となる。2人の指導者が交互にまとめ役・メディエーターにもなり、役割を分担させながら連携をはかり、楽しく続く工夫に力を注ぐ。充実した活動は「休まずに出かけよう」という参加者のモチベーシ

ンとなる。参加者は、小学生・小学校の先生とも世代間交流の機会を多く持ち、自分たちが暮らす町にも「元気な地域の顔」として価値を提供していた。B町の事例は、高齢者が健康で生きがいをもち、持続する活性化促進モデルが、しっかりと循環していた。

### 3.3 C区歌声サロン：住民互助活動

C区では民間委託管理会社が運営・管理してデイサービスを行う会場に、2014年6月以降、5つの互助サロンができた。そのうちの1つ、歌声サロンの発起人は91歳、自ら活動の会場の使用交渉を行い実現した経緯がある。活動は月に1回午前中の2時間、歌の指導と伴奏は発起人と同じ老人クラブに属する音楽指導経験者が行い、かつて学校で習った懐かしい唱歌や童謡を中心に歌う。参加は無料で申し込みや登録は不要、好きな時に気軽に参加できる場を提供している。開始時には発起人が所属する老人クラブメンバーが主体となり声掛けを行ったが、区内在住の60歳以上は誰でも参加できるように告知しているため、単独または知人との参加者も多い。参加者は30名程度、男性も4~5名参加している。C区のこのブロックは、世帯ごとの生活様式が多様であり、地域行事などにおいて活発な活動が少ない。その中で歌声サロンは技術を問わず、歌えなくとも気楽に参加できるスタイルをとっていた。しかし回を重ねるごとに参加者から「もっと教えてほしい」「歌詞だけではなく楽譜も読みたい」「発声を学びたい」という声がかかるようになり、常連の参加者は毎回熱心にメモをとる姿が目立ってきた。

開始半年後、それまで歌ったものから10曲を選び、地域包括センターの拠点となっている特養ホームで出張コンサートを実施した。利用者の男性が作成した切り絵を表紙画像とし、歌詞集を作成して参加者に配布した。この時の参加者は17名、聴衆は主に特養ホームのデイサービス利用者と入居者15名だった。発表は四季順に選曲した唱歌と最後に「きよしの夜」で終了、会場から参加して歌っても良いというスタイルとした。夏の曲「われは海の子」からは、男性観客をはじめとして手拍子をうつ人が増え、会場が一体となって参加する姿もみられた。参加者側は「初めて人前で歌う」という人がほとんどであった。40分ほどのステージ後には、聴衆から2名が自ら控室に訪問し、お礼と感想の声を届けに訪れるというサプライズもあり、成功のうちに終了した。コンサート当日の自主的な声を示す。

[参加者女性 A]

- ・ 顔が赤くなっていた。いつもと違い血のめぐりが良くなったのか、楽しかった。
- ・ 観客の反応がとても楽しそうで良かった。

[参加者男性 B]

- ・人の前で歌ったのは中学以来だ、少し緊張した。

[参加者女性 C]

- ・実は会場に来る前、娘に『老人が老人に対して一体何ができるというのか?』と咄められた。こんなに皆が喜んでくれたのだ、ということを知りて娘に堂々と伝えられる。

[参加者女性 D]

- ・本当に懐かしくて嬉しくて涙が出た。
- ・自分はこの町で生まれ育ち、空襲もここで経験した。空襲の時に、近隣の大きな寺に避難した記憶もある。
- ・これを聴けたから、また頑張って長生きができる。

[参加者男性 E]

- ・色々な人がコンサートに来るが、知らない曲ばかり、今どきの歌はわからない。
- ・今日は懐かしい歌ばかりで本当に楽しかった。

この C 区歌声サロンの事例で活性化促進モデルは成り立つのか、開始時から全活動と発表の場への同行、そしてインタビューも通して検証した。

個人が高齢となり、時間の余裕と自らの健康維持を認識した時、知人の誘いや、福祉会館のチラシをきっかけにサロン活動へ参加しようとする。サロンの発起人は地域で代々書店経営をしていたため地元の顔役となっており、知り合いが多い。リタイア後は高齢者の集まりへ出向く機会が増えたことから、他の場所でも誘いかげや、サロン参加者からの感想を得ることができる。参加者から得た感想や希望は、まとめ役として必ず指導者に伝えている。指導者は同世代の高齢者に馴染みのある曲を用意し、歌いやすい調性に変えるなど工夫し、メディエーターとしてのまとめ役が集めてきた参加者の感想を聞いてさらに選曲や内容を変化させる。そして楽しい中にも参加者が望む学習となる内容を盛り込むように工夫している。参加者個人は、コミュニケーション目的で行動を起こしたが、自らの声や歌い方を「より良くしよう」「曲の背景や本質について深く知りたい」という自己追求から、技術・知識のスキル向上を望むようになり、質問も活発に行うようになった。次回までの期間が待ち遠しく、必ず次も参加しようというモチベーションが循環する。

この C 区の事例は発足から半年、7回の活動後、すぐに発表の場が行われた。しかし発表の場が「活動成果」として設定されたことで、短期間に個人スキルとモチベーションだけの循環からグループスキル・モチベーションを伴った循環へと変化の兆しがあった。また参加者だけでなく、指導者・まとめ役も、この成果発表により、同じ地域で同じ世代を過ごした聴衆と経験の共有を

得ることができた。この思いがけない交流の機会は、大きな充実感を持った「成果」となり、サロンにグループとしてのまとまりが生まれた。個人の「生きがいの場」としてスキルとモチベーションを持った活性化促進モデルが循環を始めた。この関係を Fig. 5 に示す。

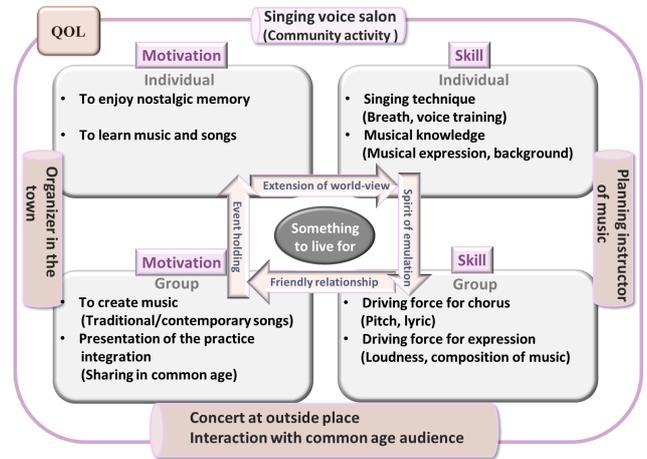


Fig. 5: Activation Promotion Model in C City

サロン活動は身近な地域で気軽に無理なく楽しく、住民と高齢の参加者が共同でつくる福祉サービスであり、高齢者の生活課題・地域社会の課題に理解を深めていくものである [11]。サロン参加者の大半は終了後どこかに集まり親睦を深めることもなく、互いに名前も知らないケースも多い。A 町・B 町の事例とは大きく異なる。このような参加者同士のコミュニケーションが少ない集まりにおいて活動を活性・継続させるためには、地域でまだ活動に参加していない知人を誘い、毎回の感想や反応を指導者に細かく伝えるまとめ役が参加者側に立ってメディエーターの役割を担うことと、高齢者が懐かしく歌いやすい曲を用意し、学習の内容を盛り込みながら次回への参加につなげる指導者との連携が重要となる。コンサートまではわずか 7 回の活動であったが、「同じ目的を持ち挑戦した成果と、聴衆との価値共有」は参加者の記憶に残り、グループとしてのモチベーションやスキルに大きな変化が表れた。自主的に難しい曲に挑戦する様子、楽譜の片付けに協力する参加者、発表をきっかけとして地域における交流が進んだ様子も見られる。このサロン活動は初期メンバーも多く定着、3 年目を迎える。

4. 高齢者の活性化を促進するモデルの要素

事例分析から、スキルとモチベーションをスパイラルアップする価値共創モデル、リーダー・メディエーターの存在、成果の活用が活性化のための共通事項であった。

#### 4.1 価値共創モデル

J管弦楽団の活動では、何よりも自らの演奏技術と団体としての演奏技術向上が望まれていた。演奏会での技術向上は達成感・充実感となり、個人とグループそれぞれのモチベーションと活動の持続・活性化へと繋がっていた。

他3事例の活動においても、高齢者は技術向上心が高いことがわかった。参加したそれぞれの活動において、先に活動していた他者・共に参加した知人などを意識しながら意欲的に取り組む。高齢者が個人活動として楽しむ趣味としての活動もあるが、コミュニティを形成する社会活動においては、グループで行うことにより「もっと上手く」と互いに比較し切磋琢磨することで団体の中での価値共創が生まれる。そして共通の目標を達成するために個人の技術・グループの技術も向上し、グループの充実が個人の生きがいとなって再びモチベーション・活動の活性化につながっていた。

活性化促進モデルは、参加者・指導者・メディエーター3者が、個人とグループの共通目標に向け、スキルとモチベーションをスパイラルアップさせながら価値共創を行う。「生きがいの場」に生まれた「成果」は、持続・活性化した活動を促進し参加者個人の「価値」ともなり、再びQOL向上・生きがいに寄与する。長く持続・活性化している活動は、参加者内だけではなく、活動の外・地域や社会に向けても明示化された価値提供を行う。共通目標の成果は達成感を伴うグループ内の共通の価値となり、さらにはグループ外の地域や観客へも価値を提供していた。これが本研究で得られた「価値共創モデル」であり、Fig. 6に示す。

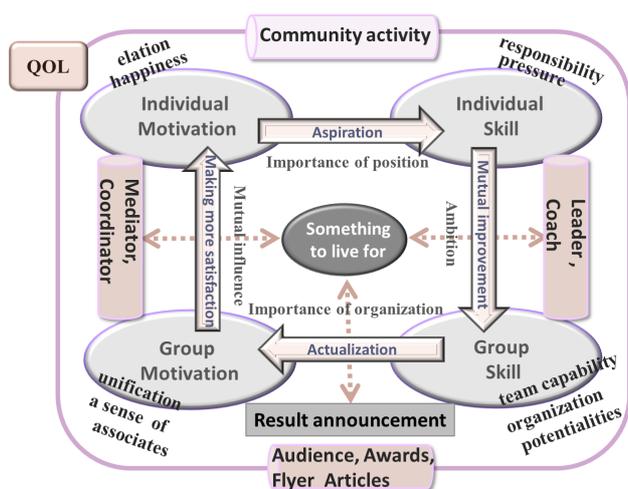


Fig. 6: Value Co-creation Model

#### 4.2 リーダー・メディエーターの役割

持続・活性化した活動を行う4事例では、いずれも指導者であるリーダーと、まとめ役であるメディエーターの存在があった。ここで4事例の8名について検証する。

- ・ J管弦楽団指揮者 男性 78 歳
- ・ J管弦楽団団長 男性 58 歳
- ・ A町老人クラブ連合会長 男性 70 歳
- ・ A町老人クラブ女性委員長 女性 65 歳
- ・ B町地区交流センター指導者 女性 47 歳
- ・ B町地区交流センター看護師 女性 52 歳
- ・ C区歌声サロン指導者 女性 79 歳
- ・ C区歌声サロン発起人 女性 91 歳

それぞれの事例では、1名が「指導役」として活動の場の予定・方向性・練習や企画などのプロセスを組み、参加者のスキル向上へと導く。もう1名のまとめ役は、メディエーターとして参加者と指導役をつなげる役目を行う。このような高齢者の自主的・互助的な集まりにおいては参加者側の要望や意見、気持ちなどを聞きとり、まとめ役がそれを指導者に伝えることが必要となる。

J管弦楽団とC区歌声サロンでは、指導技術に専門性があることから、場合によっては指導役がまとめ役の領域へアドバイスを行う工夫も見られた。A町老人クラブとB町地区交流センターでは、まとめ役が活動のコーチに関わることもあった。指導者の教える技術や知識を参加者にうまく伝える役目として、まとめ役は、ある時は指導者の教えるコーチにもなる。

場のまとめ役としてのメディエーターは、同時に参加者でもある。自らも指導者・リーダーに教わりながら他の参加者へ指導者の意思をわかりやすく伝え、指導者にも参加者の意見や要望を伝える。多様な参加者が集まる集団において、場の良好な環境維持にも努めマネジメントの役割も果たす。その上で参加者に「次回も必ず来よう」というモチベーションを起こさせ、メディエーター自身も参加者のフィードバックを自分のモチベーションとして次の活動に活かす。

指導者は時として参加者のため技術的に難しいことも指導する。まとめ役が、参加者側の立場に立つメディエーターとして、指導者との間で連携して橋渡しの役割を行い、なおかつ指導者とまとめ役の情報共有ができていくことが、持続・活性化するグループ活動においての重要なポイントとなっている。

#### 4.3 活動における成果の役割

アマチュアオーケストラの活動も含め、4事例は全て「グループとしての活動の成果」が共通目標となり、この成果がグループのモチベーション、さらには個人のモ

チベーションに寄与していた。今回の事例研究では高齢者の持続・活性化する「成果」として2点が挙げられた。

- (1) 発表を伴い、グループ内の共創と、聴衆としての他者との共創が成果としてあるもの
- (2) 何らかの勝負などで得る表彰状や新聞掲載などで、見える成果がグループの共創につながるもの

グループで共通の目的ができ、成果が明示されることで、活動の努力が価値として評価される。活動の評価は「グループ内外への価値共創」も生み、「次の新しいことへの挑戦」という活動の持続・活性化につながっていた。

## 5. 考察

### (1) 若年期・現役世代の活性化モデルとの比較

学校、または会社組織に属する若年期・現役世代でも活性化促進モデルは成立する。しかし、高齢者の活動と異なり、活動の目的や人材の確保および活動資金などがそれぞれの組織で用意されており、成果も明示される。一方、高齢者の活動の場合は、自らの興味で組織に参加するので、組織を活性化させ、うまく回す仕組み作りが難しい。このためのリーダー・メディエーターといった人材の確保と成果を明示する方法の考案が重要である。4章の4.1 価値共創モデルと同時に、それを回す4.2, 4.3を合わせて検討することが、高齢者の活性化モデルである。

### (2) 各事例のコミュニティの異質性に対する考察

本研究の各事例のコミュニティは、活動の成り立ちや形態がそれぞれ異なる。J管弦楽団は、音楽に関する技術を持ち、目的意識も明確である。C区サロンの例も、音楽活動という明確な目的がある。一方、A町老人クラブやB町交流センターの事例は、地域性が強く、参加者に依存した目的が設定されている。いずれのケースもリーダーやメディエーターが、コミュニティの特性に応じて、Fig.6の価値共創モデルをうまく回していることを事例から確かめることができる。ただ、コミュニティの異質性や特性と価値共創モデルを回すリーダーやメディエーターとの関係は、ここで取り上げた事例からは結論を導くことは出来ず、今後の課題である。

### (3) 人材育成にむけた今後の課題

事例分析から、高齢者の活性化を促進するモデルでは、技術・知識を支えるリーダー、指導者と参加者との橋渡しを行い、モチベーションを支えるメディエーターが重要な役割を担うことが分かった。対象とした事例では、これらの人材はボランティア活動に支えられていた。今後の高齢化社会では、このような活動を行える人材をどう育成し、確保するのか、が大きな課題となる。

## 6. おわりに

仕事などの組織を離れたリタイア後、個人は地域において長い時間を過ごす。豊富な経験と多くの時間を持つ高齢者は、自らのために、人生を豊かに心身ともに健康で生き生きと過ごしたいと願う。心身の健康維持には「生きがいの場」が重要である。芸術作品を創り出したり、それを鑑賞したりすることに対する欲求は、物質的に豊かになったからといってなくなる性質のものではない[12]。高齢者が活性化した活動の中では、自身の知識を増やし、目指すスキルを向上させたいと望む。各事例において、活動の充実感から得たQOLの向上は「生きがいの場」において再び個人のモチベーションとなっていた。本稿で提案した価値共創モデルは、高齢者が生きがいを通してQOLを高めるためのコミュニティ活動を進めるうえで有効である。

一方、高齢者の生きがいの場におけるモチベーションとスキルのスパイラルを支えるためには、技術面での指導者と、参加者側から場のマネジメントを行うメディエーターが重要な位置付けとなる。しかしながら、こうした人材が持つスキルや育成方法に関しては、本研究では十分な検討を行っておらず、今後の課題である。これからの高齢化社会の活性化に結び付くように、さらなる検討を進める。

## 参考文献

- [1] 内閣府: 高齢社会対策大綱, 社会参加・学習等分野に係る基本的施策(平成24年), 2012. <http://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h24/2-3.html>
- [2] 内閣府: 高齢社会白書, 社会参加に関する備え(平成26年版), 2014. [http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/s1\\_3\\_3.html](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/s1_3_3.html)
- [3] 文部科学省: 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会, 資料2(素案)(平成24年), 2012. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/koureisha/1317565.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/koureisha/1317565.htm)
- [4] 中西仁美, and 土井健司: QOLに関する概念整理－政策評価やベンチマークシステムとの関連性から－, 土木計画学研究・講演集(CD-ROM)Vol. 27, 2003.
- [5] 神谷美恵子: 生きがいについて, みすず書房, 2004. (初版1966 同社刊)
- [6] A.H. マズロー著, 小口忠彦訳: [改訂新版] 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ, 産業能率大学出版部, 1987.
- [7] 藤井美樹, and 小坂満隆: アマチュアオーケストラにおける高齢演奏家の価値共創に関する一考察, 第5回横幹連合総合シンポジウム, 東京大学・本郷キャンパス, 11月29, 30日, 2014.
- [8] 武脇誠: グループ・ベース業績給有効性のメカニズムの研究, 東京経学会誌. 経営学, Vol.270, pp. 51-62, 2011.
- [9] 山岸淳子: ドラッカーとオーケストラの組織論, PHP新書, 2013.

- [10] 藤原佳典, 杉原陽子, and 新開省二: ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義, 日本公衆衛生雑誌 Vol.52, No.4, pp.293-307, 2005.
- [11] 高野和良, 坂本俊彦, and 大倉福恵. ”高齢者の社会参加と住民組織: ふれあい・いきいきサロン活動に注目して, 山口県立大学大学院論集 Vol.8, pp129-137, 2007.
- [12] 篠田裕之, and 舘璋: SICE City-生きがい創出都市, 横幹 Vol.3, No.1, pp.60-65, 2009.

---

藤井 美樹



1988年桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ科卒業, 2015年北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士前期課程技術・サービス経営 i-MOST コース修了, 同年, 同大学院知識科学研究科博士後期課程先端知識科学コース入学, 現在に至る。高齢者コミュニティ活動と音楽の関わりについての研究に従事。サービス学会などの会員。

小坂 満隆



1977年京都大学大学院工学研究科修士課程数理工学専攻修了。同年日立製作所システム開発研究所入所。2001年から同所長。2008年北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科教授, 現在に至る。サービスシステム, 研究開発マネジメントなどの研究に従事。工学博士。電気学会, 計測自動制御学会などの会員。

---